

「生命の教育」創始者 谷口雅春先生 今月の言葉

家庭のお手伝いは子供の愛の心をはぐくむ

子供の生命が出ようとしている時を生かす

子供には大人よりも、素直に導き出せば出るところの生命が宿っている。その生命を殺してしまつたら何にもならないのです。(中略) 子供が、女の子なんかだとよく台所の仕事等など手伝いたくて仕方のないような時代があつて、怪我けがでもしそうな危あふなつかしい手附てつきでままごとみたいなことをしたがつて仕様しやうのない時がある。こういう時は子供の生命が出よう出ようとしている時である。その出ようとしている生命を出るよう出るように導いてく

れる母親があれば、そういう母親に育てられる子供はどんなにか幸福しあふだろうかと思ひます。(中略)

生うまれ出たままの続きのように感じられる幼児期では、本当に吾われと幼児と一体のような自覚があつたために本当の教育が出来たのでありますが、相そう当子供からだの身体が大きくなつて来ますと、何となしに別個の存在であるような分離の感じを持つて来て、自然にこのコップの顛覆くつがえのを見せて「そら、コップ。コップが顛覆くつがえつたでしょう。そら、水こほが零こぼれた。零こぼれた水を拭ふきましょう。そら拭いた」というような塩梅あんばい式の、一つ一つ子供が自分の内部から知ろうとし、出そうとしているものを引出ひきだすよ

うな教育が出来なくなる。そして今度は、「そんなことしていたら、台所がうるさいからあっちへ行きなさい」と、折角、子供が内部に有^もって引^{ひき}出してもらいたいものを、「うるさい、うるさい」と撥^はねつけるようになる。

この撥ねつけるようになるのは、親の方が児童と一体感を失って功利的になって来るからです。役に立つとか、役に立たぬとか、経済的とか、実用向きとか、そういう標準で子供を排斥^{はいせき}して、子供のまさに芽吹^{めぶ}かんとしている生命^{ひきだ}を引^{ひき}出すことを怠^{おろそ}かになるのであります。この折角^{せつかく}今^{いま}引出^{ひきだ}されたいと子供の生命^{いのち}が内部から溢^{あふ}れ出て、これを手伝^{てん}いたい、葉^なつ葉^はを截^きりたいというふうな、内部から溢^{あふ}れ出て来るものを抑^{おさ}えて脇^{わき}へ除^のけてしま^まうというふうなことになる、これは教育が手段^{しゅん}に征服^{せいふく}されたのであります。教育が生活^{せいかつ}そのものにならないで、或^あることの手段^{しゅん}になる——ここに教育の墮落^{だらく}があるのであります。それで、手段^{しゅん}でなしに「今^{いま}」を生^なきさす——「今^{いま}」生命^{いのち}が溢^{あふ}れ出して「こうしよう、こうしよう」「こうしたい、こうしたい」と、樹木^{じゅもく}の新芽^{しんめ}のようにまことに

内部から溢れ出ようとしている時に児童の生命を生かすというふうにしたならば、人間の内部に流れている能力が充分に発達するのです。

(新編『生命の真相』第44巻22〜27頁)

子供の愛の心を摘み取ってはいけない

この何となく母親の台所仕事の手伝いなんかしたいという時には、単に能力が発現しているだけではなしに、愛の心が動いている、自分からして、母親を喜ばして上げたい、という愛の心が起っているのだけれども、親の方^{ほう}では実用^{じつよう}一点張^{てんぱ}りで、そんな愛を受けたって時間がかかるばかりである、邪魔^{じやま}になって却^{かえ}って仕事^{しごと}が運ばないと、愛の心を功利的価値で計算して、実用一点張り、経済向き一点張りで片付けてしまおうとする。こうなると、折角^{せつかく}愛の心で「親達の手助けをして上げたい」という生命^{いのち}の働きが動き出そうとしている時に、その生命^{いのち}を押込^{おしこ}めてしまうという事になる。そして、青年期になつてか

らその子供に「ちょっと私の手伝いをしておくれ」といっても、もうその子供は手伝いをする喜びを、その最初の芽生に於て摘まれてしまっているのです。折角「出よう、出よう」「手伝いしたい、手伝いしたい」と生命が芽吹いている時に「邪魔になる。うるさい！ あっちへ行っておれ。」こうやられたものだから、今度実際に手伝って欲しい時、大分子子供も成長して能力が出来たとき手伝って欲しいと思っても、「何だ、母さんったら利己主義だわ」ということになって手伝わない不親切な子供が出来ると、子供の心は、親の心の影だったのであります。

（新編『生命の真相』第44巻27～28頁）

子供は親に喜ばれることをこそ喜ぶ

子供に仕事をさせてはいけないというのは謬見である。適当な分量の仕事は子供の生命の生長に欠くべからざるものなのだ。仕事は子供の生命の生長に欠くべからざるものなのだ。仕事は生命を建設的に使用する方法を

教える。そして子供の生命のうちに建設的な傾向と創意的な傾向とを育てあげる。

建設的傾向——これは才能の発達の土台石となるものだ。この傾向が強ければ強いほどその人間は生長する。幼時に培われた傾向は生長してから養成した傾向よりも力強く根を張るのだ。（中略）

子供が仕事を嫌がるというのは嘘だ。無理に命令的にさせないで、自分の好きな仕事をやらしてやるならば、子供が仕事をしたがらないということはない。

女の子は特に仕事を好む。生れつきの愛の性状が手助けを好ませる。もう三、四歳にもなると母親の仕事の手助けをしたがって仕様がないう。させるが好い。が、仕事は徐々に慣らすが良い。急いではならぬ。そして、子供の手助けを真に喜んで感謝してやるようにすれば、子供は「愛は感謝を受ける」という事実を体験する。喜ばれることがどんなに嬉しいかということを経験する。これは人間の正しい生長に必要なことである。

（新編『生命の真相』第22巻86～88頁）